

処方番号：167A 処方名：牛車腎気丸（ごしゃじんきがん）

処方構成：

地黄 5-6、山茱萸 3、山薬 3、沢瀉 3、茯苓 3、牡丹皮 3、桂枝 1、加工ブシ 0.5-1、牛膝 2-3、車前子 2-3

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度以下から虚弱で、疲れやすく、四肢が冷えやすく尿量減少し、むくみがあり、ときに口渇があるものの次の諸症

効能・効果：

下肢痛、腰痛、しびれ、高齢者のかすみ目、かゆみ、排尿困難、頻尿、むくみ、高血圧に伴う随伴症状の改善（肩こり、頭重、耳鳴り）

原典：濟生方

出典：

解説：

八味丸に牛膝、車前子を加えた処方である。八味丸の作用を増強させるときに用いる。胃腸が弱く下痢の傾向のあるもの、胃内停水著明のもの、服用により食欲減退するものには用いてはならない。

本方の鑑別については八味地黄丸（167）の解説を参照のこと。

167A.牛車腎氣丸

参考文献名	乾地黄	地黄	熟地黄	山茱萸	山茱萸肉	山藥	薯蕷	沢瀉	茯苓	牡丹皮
処方分量集	-	5	-	3	-	-	3	3	3	-
診療の実際 注1	8分	-	-	4分	-	4分	-	3分	3分	3分
診療医典 注2	8分	-	-	4分	-	4分	-	3分	3分	3分
症候別治療	5	-	-	3	-	3	-	3	3	3
処方解説 注3	8	5	-	3	-	3	-	3	3	3
後世要方解説	5	-	-	3	-	3	-	3	3	3
漢方百話	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
応用の実際 注4	6	-	-	3	-	3	-	3	3	3
明解処方 注5	8	-	-	-	4	4	-	3	3	3
漢方処方集 注6	-	-	6	2	-	3	-	3	4	3
漢方入門講座	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
漢方医学	-	5	-	3	-	3	-	3	3	3
精撰百八方	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
古方要方解説	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
成人病の漢方療法	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
入門漢方医学	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
EBM漢方	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

参考文献名	丹皮	桂枝	附子	炮附子	白川附子	牛膝	車前子	用法・用量
処方分量集	3	1	1	-	-	3	2	
診療の実際 注1	-	1分	1分	-	-	3	3	*1
診療医典 注2	-	1分	1分	-	-	3	3	*2
症候別治療	-	1	0.5	-	-	3	3	
処方解説 注3	-	1	0.5	1	-	()	()	*3
後世要方解説	-	-	~1	-	-	-	-	
漢方百話	-	-	-	-	-	-	-	
応用の実際 注4	-	1	0.5	-	-	3	3	
明解処方 注5	-	1	1	-	-	3	3	
漢方処方集 注6	-	2	-	-	1	2	2	
漢方入門講座	-	-	-	-	-	-	-	
漢方医学	-	1	1	-	-	3	3	
精撰百八方	-	-	-	-	-	-	-	
古方要方解説	-	-	-	-	-	-	-	
成人病の漢方療法	-	-	-	-	-	-	-	
入門漢方医学	-	-	-	-	-	-	-	
EBM漢方	-	-	-	-	-	-	-	

*1 以上を煉蜜で丸とする。1日3回2ずつ服用する。八味丸(腎氣丸)に牛膝、車前子各3を加える。下段八味丸料処方

*2 以上を煉蜜で丸とする。1日3回2ずつ服用する。八味地黄丸(腎氣丸)に牛膝、車前子各3を加える。下段八味地黄丸料処方

*3 混和末とし、蜂蜜で練り、梧子大の丸(1回約0.2)とし、1日2回15丸ずつ酒で服用する。漸次増量して25丸とする(上段丸薬、下段料)

〔注1〕 八味丸の働きをさらに増強させる意味に用いられる。

〔注2〕 八味丸 本方で腰痛がはげしく、尿の不利するものには牛膝、車前子を加えて、牛車腎気丸として用いることがある。

〔注3〕 八味丸の作用をさらに増強させたものである。

〔注4〕 八味丸の証で、利尿減少、浮腫のはなはだしい場合。

〔注5〕 老人の腰痛、脚腫、陰痿には、車前子、牛膝各3.0を加えた、牛車腎気丸を常用する。

〔注6〕 腎虚、腰重脚腫、小便不利。

参考文献：方彙口訳 浅井貞庵述 処方集校訂大塚敬節 水腫門 金匱腎気丸 干茯苓桂枝走薯蓣牡膝車ノ十味ナリ。此ノ方ハ金匱ノ「腎気丸」トアレドモ即チ今云フ処ノ牛車腎気ナリ。目的トスル処ハ脾腎ニ歳ノ虚ニシテ小水ノ通ジ悪ク腹ハ脹リ腰ヨリ下ニモ水気アルノナリ。

稿本 方輿輓 有持桂里口述 水腫 加味腎気圓 宋徽用和濟生方 治腎震腰重脚腫小便不利 附子二兩 白茯苓 沢瀉 山茱萸 山藥 車前子 牡丹皮各一兩 肉桂 牛膝 熟地黄各半兩 右為末煉蜜為圓每服七十圓空心米飲下後人名金匱腎気丸……

是ハ本方ノ腎気圓ハカリニテハ通シノ方カヒナキ故牛膝車前ノ二味ヲ加シナリ。此腫氣ハ多クミナ腰ヨリ以下ナリ。タマタマ上ニアルコトモアリ。腹ニアル水腫ニモ用ユ。鼓脹ニモ用テアリ。而レドモ此方ノアタリ前ハ先ツ下部ナリ。…… 此方腰以下ノ腫氣ニ用ユ。夫ヨリノ 腰以上ニ及ヒ、或一身ニ及ヒシ者ニモ用イルナリ。

鼓脹 腹滿 加味腎気圓 是ハ鼓脹ノ證ニ属スル者ヲ治スル方ナリ。儲ユノ腰痛小便不利タケハ腎気圓ノアタリ前ニノ誰テモ用イルモノナレドモ此或肚腹以下ノ症ハ腎気圓ヲモチツケヌト用ヒニクキ者ナリ。ヨク其場ヲ見レハ大ニ効アルモノナリ。肚腹以下ノ症ハ有モアリナキモアリ故ニ或云此方ハ鼓脹ニモ腹脹ニモ用イルナリ。……

処方番号：167B 処方名：六味丸（六味地黄丸）（ろくみがん／ろくみじおうがん）

処方構成：

地黄 5-6, 6-8、山茱萸 3, 3-4、山薬 3, 3-4、沢瀉 3, 3、茯苓 3, 3、牡丹皮 3, 3
（左側の数字は湯、右側は散）

用法・用量：

- （1）散：1回 2g 1日 3回
- （2）湯

しぼり：

体力中等度以下から虚弱で、疲れやすく尿量減少又は多尿で、ときに手足のほてり、口渴があるものの次の諸症

効能・効果：

排尿困難、頻尿、むくみ、かゆみ、夜尿症、しびれ

原典：小児直訣

出典：

解説：

この証は八味丸に準じ、しかも陰証ときめがたく附子の用いられないものに処方される。したがって八味丸から桂枝、附子を去ったものである。食欲不振、下痢の傾向あるものは禁忌。

本方の鑑別については八味地黄丸（167）の解説を参照のこと。

167B.六味丸

参考文献名	地黄	山茱萸	山藥	沢瀉	茯苓	牡丹皮	熟地黄	丹皮	乾地黄	用法・用量
処方分量集	8	4	4	3	3	3	-	-	-	*1
診療の実際	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
診療医典	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
症候別治療	(丸) 8	4	4	3	3	3	-	-	-	*2
	(煎) 5	3	3	3	3	3	-	-	-	
処方解説	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
後世要方解説 注1	-	4	4	3	3	-	4	3	-	*3
漢方百話	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
応用の実際 注2	-	3	3	3	3	3	-	-	6	*4
明解処方	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
実用漢方療法 注4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
漢方と民間百科 注4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
薬局漢方	5	3	3	3	3	3	-	-	-	
入門漢方医学	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

*1 粉末にし蜂蜜で丸剤に作り2-5宛1日3回服用

*2 末として煉蜜で丸とし1日2ないし3を1日3回服用

*3 蜜丸空心時塩湯にて服す。冬は酒にて服す。

*4 八味地黄湯と同様に煎剤で用いてもよい

〔注1〕 性的衰弱で陰萎、遺精、耳鳴りを訴え根気なきもの。初老以後の者で腰痛、眼精疲労、視力減退するもの。糖尿病にて虚状を呈し、陰萎、多尿口渴するもの。慢性腎炎、萎縮腎にて疲労多尿のもの。夜尿症、筋骨萎弱。

〔注2〕 八味丸に準じ、しかも陰証ときめがたく、附子を用いられないもの。小児は生活力が旺盛で陽気が強い為、附子を用いがたいことが多い。そのときはこの方とする。本方は八味地黄湯と同様に煎剤で用いてもよい。また本方と八味丸と区別しにくいときは、八味丸の附子を去り黄柏を加えることがある。

〔注3〕 疲れやすく肩もこりやすい。ときにはめまいや頭の重いときもある。腰から下に力の抜けた感じがわずかながら感じられることが多く、ひざがガクガクしたり転びやすかったりする。夜間排尿に起きる回数が多く、そのたびに水を飲む傾向がある。へソの上と下の腹力を手で押えてみると、上に比べて下がはるかに腹力が落ちているという症状が、この処方の大事なキメ手。

〔注4〕 小児夜尿症。

処方番号：167C

処方名：杞菊地黄丸（こきくじおうがん）

処方構成：

地黄 5-6, 6-8、山茱萸 3, 3-4、山薬 3, 3-4、沢瀉 3, 3、茯苓 3, 3、牡丹皮 3, 3、枸杞子 4, 4、菊花 3, 3 （左側の数字は湯、右側は散）

用法・用量：

（1）散：1回 2g 1日 3回

（2）湯

しぼり：

体力中等度以下で疲れやすく尿量減少又は多尿で、ときに手足のほてりや口渴があるものの次の諸症

効能・効果：

かすみ目、つかれ目、のぼせ、頭重、めまい、排尿困難、頻尿、むくみ

原典：医綴

出典：

解説：

六味地黄丸に菊花と枸杞子を加えたもので、目がかすむ・目がくらむ・まぶしい・目の乾燥感や痛み・視力減退・頭痛・頭のふらつき・足腰の筋力低下・口腔乾燥・健忘・不眠・耳鳴り・口の乾き、脇痛、五心煩熱（手足・胸の熱感）、寝汗、遺精、月経量減少などの症候が顕著にみられるものに用いる。

腎陰虚証に、肝陰（血）虚による眼症状を伴う場合（肝腎陰虚）に用いる。滋養肝腎、滋陰明目の作用がある。を目標とする。所見としては、舌質紅苔少、脈細数。臨床における適応症としては、老人性退行性疾患、多発性神経炎、骨粗鬆症、腎障害、老人性白内障、シェーグレン症候群など。

167C.杞菊地黄丸

参考文献名		枸杞子	菊花	熟地黄	山茱萸	山藥	茯苓	牡丹皮	沢瀉	用法・用量
中医処方解説	注1	5	3	8	4	4	3	3	3	*1
漢薬の臨床応用	注2	4	2	5	1	4	3	2	3	*2

*1 六味地黄丸に甘菊花、枸杞子を加える。蜜丸にするか、水煎服。

*2 杞菊地黄丸(丸) 水煎服 文献量の1/3を記載

注1

効能は滋補肝腎、清肝火、明目。適応症は肝腎陰虚で目がかすむ、目がくらむ、まぶしい、目の乾燥感や痛み、視力減退、頭痛、頭のふらつきなどの肝陰虚、火旺(肝陽上亢)の症候が顕著にみられるもの。舌質は紅～深紅、少苔、脈は弦細数

注2

頭がふらつく、目がかすむなどの肝腎不足の症状(慢性肝炎・視神経炎など)に用いる。甘菊花に枸杞子を配合し、杞菊地黄丸(湯)を使用する。

処方番号：167D

処方名：知柏地黄丸（ちばくじおうがん）

処方構成：

地黄 5-6, 6-8、山茱萸 3, 3-4、山薬 3, 3-4、沢瀉 3, 3、茯苓 3, 3、牡丹皮 3, 3、知母 3, 3、黄柏 2, 2 （左側の数字は湯、右側は散）

用法・用量：

（1）散：1回 2g 1日 3回

（2）湯

しばり：

体力中等度以下で疲れやすく胃腸障害がなく、口渴があるものの次の諸症

効能・効果：

顔や四肢のほてり、排尿困難、頻尿、むくみ

原典：医宗金鑑

出典：景岳全書

解説：

六味地黄丸に知母と黄柏を加えたもので、ほてり・のぼせ・熱感・午後の微熱・咽痛・口渴・寝汗・性欲仮亢進などの症状があきらかなものに用いる。腎陰虚証に虚熱症状を伴う場合（腎陰虚内熱、陰虚火旺）に用いる。滋陰補腎・清虚熱の作用がある。排尿困難、夜間尿、勃起障害、不妊症、遺精、月経量減少、脱毛症、足腰の筋力低下、健忘、不眠、顔面痛、発熱、のぼせ、のど・口の乾き、五心煩熱（手足・胸の熱感）、寝汗などを目標とする。『勿誤藥室方函口訣』に、「此の方は滋陰の剤にて虚熱に用ゆ。又腰以下血燥して煩熱酸疼する者にも用ゆ。先哲の説に、腎虚を治するに二つの心得あり。所謂腎には水火の二つ有りて、其の中に人の性により水虧けて火の盛んなる者あり、軽きときは此の方、重きときは滋陰降火湯の類を用ゆ。又火衰へて水泛滥する証あり、是を八味丸とす。此の両途を弁じて、此の方の之く処は真水が乏しくして命門の火の亢る症と心得べし。」とある。『医方考』には「腎勞、背仰ぎ難く、小便不利する者、餘瀝、囊湿り、瘡生じ、小腹裏急、便赤黄なる者、六味地黄丸加黄柏知母、之を主る」とある。

167D.知柏地黄丸

参考文献名	熟地黄	山茱萸	山藥	牡丹皮	茯苓	沢瀉	知母	黄柏	用法・用量
中医処方解説 注1	8	4	4	3	3	3	3	3	*1

*1 六味地黄丸に知母、黄柏を加える。

注1

効能は滋補肝腎、清肝瀉火 適応症は肝腎陰虚でほてり、のぼせ、熱感、午後の微熱、咽痛、口渴、寝汗、性欲仮亢進など陰虚火旺の症候があきらかなもの。舌質は深紅で乾燥、少ない苔～無苔、脈は細数

処方番号：167E

処方名：味麦地黄丸（みばくじおうがん）

処方構成：

地黄 5-6, 6-8、山茱萸 3, 3-4、山薬 3, 3-4、沢瀉 3, 3、茯苓 3, 3、牡丹皮 3, 3、麦門冬 6, 6、五味子 2, 2 （左側の数字は湯、右側は散）

用法・用量：

（1）散：1回 2g 1日 3回

（2）湯

しばり：

体力中等度以下で疲れやすく胃腸障害がなく、ときに咳、口渇があるものの次の諸症

効能・効果：

下肢痛、腰痛、しびれ、高齢者のかすみ目、かゆみ、排尿困難、頻尿、むくみ、息切れ、から咳

原典：医級

出典：

解説：

六味地黄丸に五味子と麦門冬を加えたもので、乾咳・息切れ・吸気性呼吸困難・無痰あるいは粘痰・ときに痰に血がまじる・口渇などの症候を伴うものに用いる。

腎陰虚証に肺陰虚の症状を伴う場合（肺腎陰虚）に用いる。痰の少ない喘鳴があり、嘔声、のど・口の乾き、のぼせ、五心煩熱（手足・胸の熱感）、寝汗、不眠、足腰の筋力低下などを目標とする。

167E.味柏地黄丸

参考文献名	麦 門 冬	五 味 子	熟 地 黄	山 茱 萸	山 藥	牡 丹 皮	沢 瀉	茯苓	用法・用量
中医処方解説	注1	6	2	8	4	4	3	3	*1

*1都気丸(六味地黄丸に五味子を加える)に麦門冬を加える。蜜丸にするか、水煎服

注1

効能は効能は滋補肝腎、潤肺平喘 適応症は肝腎陰虚の症候に、乾咳、息切れ、吸気性呼吸困難、無痰あるいは粘痰、ときに痰に血がまじる。口渴などの肺陰虚の症候をともなうもの。舌質は紅、少苔、脈は細数

処方番号：168

処方名：八味疝氣方（はちみせんきほう）

処方構成：

桂枝 3-4、木通 3-4、延胡索 3-4、桃仁 3-6、烏薬 3、牽牛子 1-3、大黃 0.5-1、牡丹皮 3-4

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度あるいはそれ以上で、冷えがあるものの次の諸症

効能・効果：

下腹部の痛み、腰痛、こむら返り、月経痛

原典：集驗良方考按

出典：漢方処方集

解説：

『勿誤藥室方函口訣』に「この方は疝氣血分に属する者を主とす。当帰四逆加呉茱萸生姜湯は和血の功あり。この方は攻血の能あつて虚実の分とす（本方は実、当帰四逆加呉茱萸生姜湯は虚）。又婦人血氣刺痛を治す。福井にては小腹に瘀血の塊あつて脚攣急し寒疝の形の如き者、或いは陰門に引き時々痛みあり、或いは陰戸突出する者、又腸癰などにも用ゆ。云々」と記載されている。疝の腰腹部痛に応用するが腹痛の場合は鼠径部から大体内側に痛みが引きつれる場合に用い、腰部痛は急性腰痛で腰から下肢の膀胱経、胆経に痛みが放散する場合に応用する。重い物を持ち上げようとして急に腰部の筋肉を傷めた急性腰痛いわゆる「ギックリ腰」に著効を奏す。

但し本方中に大黃、牽牛子を含んでいるので下痢しやすい傾向の場合は用いない方がよい。本方は実証で便秘傾向のある急性腰痛、陰囊痛、下腹部痛で大腿内側に放散する場合が主たる目標である。

168.八味疝氣方

参考文献名	桂枝	木通	延胡索	桃仁	烏薬	牽牛子	大黃	牡丹皮	用法・用量
臨床応用漢方処方解説 注1	3	3	3	3	3	1	1	3	*1
症候による漢方治療の実際	3	3	3	6	3	3	1	3	
経験・漢方処方分量集	3	3	3	6	3	3	1	3	
改訂新版漢方処方集 注2	3	3	3	4	3	2	1	3	*2
成人病の漢方療法 注3	3	3	3	3	3	1	1	3	
1000万人の漢方診断と治療の実際 注4	3	3	3	3	3	1	1	3	
漢方の臨床と処方 注5	4	4	4	4	3	2	1	4	*3

*1 便通あれば大黃を去る

*2 牽牛子は煎じて滓を去ってから加える。

*3 八味疝氣湯

注1

寒疝臍を繞って痛み、及び脚攣急するを主治す。或いは陰丸腫痛、或いは婦人瘀血、血塊痛みを作し、或いは陰戸突出(子宮脱出)、腸癰等、凡そ小腹以下諸疾、水閉瘀血に属する者並びに治す。痺

疝氣・腸疝痛・急腹痛・脚攣急・下肢血栓性静脈炎・睾丸痛・精系痛・腎石疝痛・子宮脱出などに応用される。

注2

冷え腹で痛むもの、或いは脚攣急、或いは陰囊睾丸腫、或いは婦人月経不順血塊痛みをなすもの、或いは子宮脱。

注3

腹中に冷寒をおぼえて痛み、それが内股にまでひびく感じのする疝痛に用いる。

注4

疝痛、睾丸炎

注5

腰間神経痛(下腹から腰にかけて痛むもの)

処方番号：169

処方名：半夏厚朴湯（はんげこうぼくとう）

処方構成：

半夏 5-6、茯苓 5、厚朴 3、蘇葉 2、生姜 1-2（ヒネシヨウガを使用する場合 3-4）

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度をめやすとして、幅広く応用できる。気分がふさいで、咽喉・食道部に異物感があり、ときに動悸、めまい、嘔気などを伴う次の諸症

効能・効果：

不安神経症、神経性胃炎、つわり、せき、しわがれ声、のどのつかえ感

原典：金匱要略

出典：

解説：

別名四七湯、大七気湯

本方は咽喉に物がつまったような感じの訴えを目標とする。気剤の代表的処方である。その神経症状は、気分が重く、ふさぎ、めいるような気持であるという。

169.半夏厚朴湯

参考文献名	半夏	茯苓	厚朴	紫蘇葉	蘇子	生姜	乾生姜	用法・用量
処方分量集	6	5	3	2		4	又は1	
診療の実際 注1	6	5	3	2	-	4		
診療医典 注2	6	5	3	2	-	4	-	
症候別治療 注3	6	5	3	2	-	4	-	
処方解説 注4	6~8	5	3	2	-	-	1.5	*
後世要方解説	-	-	-	-	-	-	-	
漢方百話 注5	6	5	3	2		4	又は1	
応用の実際 注6						2		
明解処方 注7	6	5	3	3	又は10.0	2	-	

*一般には法の如く煎じて3回に分けて温服しているが、原本では4回に分け、日中3回、夜1回服用することになっている。

〔注1〕 胃腸が虚弱で軽度の鼓腸、腹満感、胃内停水があり気分の鬱塞するもの。胃腸虚弱症、胃アトニー症、食後の胃部停滞感、悪心のあるもの、腹部膨満感、ノイローゼ、気管支炎、感冒後の聲音嚶嘶、喘息、百日咳、妊娠悪阻。

〔注2〕 胃腸が弱く、胃部の停滞感、腹部の膨満感、胃内停水、ガスの滞留などのあるもの。神経症、血の道症、気管支喘息、食道けいれん、気管支炎、百日咳、妊娠悪阻、胃炎、胃下垂症、食道狭窄、胃アトニー。

〔注3〕 神経症、梅核気、めまい、発作性の心悸亢進、不安感、気鬱、咽頭異物感、胃アトニー、燕下困難。

〔注4〕 体質が虚状で性格が女性的、神経質のものに現われる。気分のふさがったもの。胃腸虚弱症、胃下垂症、胃アトニー症、食道憩室症、食道痙攣、妊娠悪阻、神経衰弱、ヒステリー、神経質、ノイローゼ、神経性食道狭窄症、恐怖症、鬱病、扁桃炎、気管支炎、喘息、百日咳、嚶声、咽喉刺激感、異物感、痒痒感など。

〔注5〕 本方は気を鎮め、胃内停水を去る効がある。咽喉の異常感覚、血の道の諸神経症、心悸亢進と呼吸促進が発作的に来て、心配と不安のはなはだしいものによい。心下は軟かく胃内停水がある。憂鬱でめいり込む、消極的、貧血症、無力性、咽中痞感がある。虚証。

〔注6〕 胃腸が弱く、皮膚や筋肉の緊張が悪い虚弱体質の人で、軽い鼓腸、腹満感があり、咽喉にものがつまったような塞がった感じのあるもの。胃アトニー症、胃下垂症、食道けいれん、妊娠悪阻、神経性心気症、不安神経症、神経衰弱、ヒステリー、気管支喘息、百日咳、気管支炎。

〔注7〕 神経不安症、尿量多く排尿回数も多い。胃腸弱く、自訴多く疑い深い。咽喉部に異物感あり、食欲不振、目眩、心悸亢進、嘔吐。

処方番号：170

処方名：半夏散及湯（はんげさんきゅうとう）

処方構成：

半夏 3、桂枝 3、甘草 3

用法・用量：

湯

しばり：

体力に関わらず広く用いられる

効能・効果：

のどの痛み、扁桃炎、のどの荒れ、声嘎れ

原典：傷寒論

出典：

解説：

原典の『傷寒論』に「少陰病、咽中痛、半夏散及湯之を主る」と記載されている。これの服用方法として「先ず三味の生薬を別々に搗き篩い、散剤にして服用するが、服用が不可能なときには煎じて服用する。」と指示している。半夏は成分中のホモゲンチジン酸が咽を刺激して強いえぐみを感じさせる原因となるが、この副作用は生の生薬を用いると更に増強される。そのために散剤では服用が困難な場合がありその場合は煎じて服用するように指示し処方名も散と湯いずれも用いるという意味から半夏散及湯されている。しかしながら実際に服用してみると散剤は殆どの人に半夏のえぐみが生じるので散剤よりも煎じて服用する方が良い。

浅田の『方函口訣』に「甘草・桔梗湯その他諸咽痛を治するの薬、寸効なき者に用いて即効あり。」と記載されている。甘草湯或いは桔梗湯など咽喉痛に用いる処方でも半夏散及湯を用いると即効があるというわけである。感冒で咽喉痛の強いときに初期なら葛根湯に、少し経過した後なら柴胡桂枝湯に半夏散及湯を合方して用いるとより効果的である。柴胡桂枝湯には半夏散及湯の成分は含まれているが、咽喉痛を治す効果をより強めるために半夏散及湯を合方することもある。

170.半夏散及湯

参考文献名	半 夏	桂 枝	甘 草	用法・用量
症候による漢方治療の実際 注1	3	3	3	
経験・漢方処方分量集	6	4	2	*1
明解漢方処方 注2	3	3	3	*2

*1 半夏湯

*2 半夏あって、服用を嫌う者は煎液として用いる。

注1

・感冒のはじめ、少しのどがいたむというものにはよい。

・冬時、寒にやぶられて咽喉の腫痛する者には半夏散を湯として用いて効がある。発熱悪寒があっても、半夏湯で治すものである。此の症は多くは冬季にみられる。

注2

必須目標：①声枯れ②寒冷刺激によるもの③発熱なし。

確認目標：①平常胃腸の弱い体質

適応症：冷房病の声枯れ。寒風による声枯れ。

処方番号：171

処方名：半夏瀉心湯（はんげしゃしんとう）

処方構成：

半夏 4-5、黄芩 2.5-3、乾姜 2-2.5、人参 2.5-3、甘草 2.5-3、大棗 2.5-3、黄連 1

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度で、みぞおちがつかえた感じがあり、ときに悪心、嘔吐があり食欲不振で腹が鳴って軟便又は下痢の傾向のあるものの次の諸症

効能・効果：

急・慢性胃腸炎、醗酵性下痢、消化不良、胃下垂、神経性胃炎、胃弱、二日酔、げっぷ、胸やけ、口内炎、神経症

原典：傷寒論

出典：

解説：

少陽病に属し、処方構成は黄連湯（桂枝と黄芩の違い）と類似しているが、黄連湯は腸部、本方は胃部の疾患に主な効果がある。腹痛は黄連湯より程度が軽い。下痢は軟便程度で裏急後重もあるが一度下痢すれば一応さっぱりする。

半夏瀉心湯（171）・甘草瀉心湯（171A）・生姜瀉心湯（171B）は類縁の方剤である。三方剤の鑑別は、半夏瀉心湯に比べ下痢の回数が多くイライラ感のあるものは甘草瀉心湯、はきけやげっぷのあるものには生姜瀉心湯を用いる。

171.半夏瀉心湯

参考文献名	半夏	黄芩	乾姜	人参	甘草	大棗	黄連	用法・用量
処方分量集	5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	1	*1
診療の実際 注1	5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	1	
診療医典 注2	5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	1	
症候別治療 注3	5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	1	
処方解説 注4	5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	1	
後世要方解説	-	-	-	-	-	-	-	
漢方百話 注5	5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	1	
応用の実際 注6	4	3	2	3	3	3	1	
明解処方 注7	6	3	3	3	3	3	1	

* 水600ccをもって煮て400ccとし、滓を去り、再び火にかけて煎じつめて250ccとし、3回に分けて温服する。一般には再煎を省略しているが、再煎するとのみやすくなる。

〔注1〕 心下部痞塞感、悪心、嘔吐、食欲不振等しばしば胃内停水、腹中雷鳴、下痢を伴うものの胃カタル、腸カタル。

〔注2〕 心下痞硬、悪心、嘔吐、食欲不振、腹中雷鳴して下痢のあるものの胃腸炎、胃潰瘍、胃下垂症。

〔注3〕 心下痞硬、腹中雷鳴、嘔吐、下痢のあるもの。急性・慢性胃炎による嘔吐、食欲不振、肩こり。

〔注4〕 悪心、嘔吐、食欲不振のあるもの。急性・慢性胃炎、腸炎、胃酸過多症、胃拡張症、胃下垂症、胃潰瘍、十二指腸潰瘍、胃腸カタル、誤薬新薬による胃障害、心下痞え、悪阻、神経性嘔吐、口中糜爛、口内炎、下痢、神経衰弱など。

〔注5〕 心下痞硬、腹中雷鳴を主訴とし、嘔吐下痢を客証とすることが本方の正証である。心下痞満および心下痞を呈する場合にも用いてよい。いずれの場合でも心下に熱邪と水邪が停滞し、ガスを生じて心下痞を訴えることは必須条件である。

〔注6〕 体質、体力が中位の人で、食物が心下部に痞え、食欲不振、嘔きけ、嘔吐、ときに軽い上腹痛がある。みぞおちに異和感があり、胃の存在を感じ、精神不安、神経過敏を呈するもの。急性・慢性胃カタル、胃アトニー症、胃下垂症、胃酸過多症、胃潰瘍、不眠症、神経症。

〔注7〕 胃部が痞えて硬く、食欲不振、嘔吐または嘔吐感、季肋部に抵抗圧痛なし、舌証は湿潤して白苔がある。腹中雷鳴、下痢、げっぷを認めるもの。胃腸カタル、胃酸過多症。

処方番号：171A 処方名：甘草瀉心湯（かんぞうしゃしんとう）

処方構成：

半夏 4-5、黄芩 2.5-3、乾姜 2-2.5、人参 2.5、甘草 3-4.5、大棗 2.5、黄連 1

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度で、みぞおちがつかえた感じがあり、ときにイライラ感、下痢、はきけ、腹が鳴るものの次の諸症

効能・効果：

胃腸炎、口内炎、口臭、不眠症、神経症、下痢

原典：傷寒論、金匱要略

出典：

解説：

半夏瀉心湯に甘草が加味されたものである。みぞおちがつかえて苦しく、押さえると堅い感じがし、腹がグルグルと鳴って下痢するとき、又は気分が落ち着かず、安眠できないようなときに用いる。なお、本方では特に乾姜を用いる。

本方の鑑別には半夏瀉心湯（171）の解説を参照のこと。